



サンプル

静まり返った午後の教室に、チョークが黒板を弾く規則正しい音だけが響いている。

いつもなら最前列で誰よりも真剣にノートを取り、教師の言葉を一言も聞き漏らすまいと輝かせていたはずの赤の瞳は、今は激しい快楽と恐怖にひたすら泳いでいた。

唇をかみしめ頭を振ると、艶やかで健康的な赤い髪が揺れる。

机に両手を突いたまま、大和悠緋（ヤマト ユウヒ）は目を強くつむり身悶えていた。

（あ、ぐ……っ、また、動いて……っ、いやだ、止まって、くれ……っ！）

自身の尿道口のすぐ裏側、淫靡な窄まりに、潜伏している生き物がくぷくぷと卑猥に泡立つように蠢き始める。

「は、あ……っ、ふ、うう……っ」

だらりと垂れそうになる涎を必死に飲み込み、太ももをきつく擦り合わせて声を堪えるが、震える吐息までは隠しきれない。

脂汗が滲む端正な横顔は、異常なほど真っ赤に上気していた。

「ヤマトくん、大丈夫……？ 顔、すごい赤いよ」

隣の席の女子生徒が、悠緋の異変に気づいて心配そうに覗き込んできた。

普段から生真面目で、誰に対しても優しく頼りがいのある優等生、そんな彼だからこそ、こうして弱々しく蹲る姿に周囲もざわつき始める。

教壇の教師もチョークを止めて振り返った。

「大和、どうした？」

クラス中の視線が一斉に自分に集まる。

悠緋は自身のジクジクと火照る下腹部、男としての機能の奥をじわじわと侵食していく熱を両手でぎゅっと押さえた。

「す、みません……ちょっと、お腹が、痛くて……っ」

声を出すだけで、粘膜が『ヤツ』の気配を思い出してきゅうきゅうと収縮する。

悠緋は、ガタガタと震える脚でなんとか立ち上がると、消え入りそうな声で懇願した。

「ほ、保健室へ……行ってきても、いいですか……っ？」

「ああ、確かに顔が赤いな。大和、無理をせず、直ぐに行きなさい。誰か付き添いは」

「い、いえ！ 一人で、大丈夫です……っ！ 失礼します……！」

誰かに触られたら、その瞬間に達してしまうだろう。

悠緋は逃げるように教室を飛び出した。

「く、う……っ、は、あ、……っ」

教室を出て、目的のトイレまではあと数十メートル、それだけだというのに、今の悠緋にとっては果てしなく遠い道のりに思えた

尿道に潜む『ヤツ』が、彼の焦りを煽るようにグズリと質量を増す。

『よく頑張ったね、偉いよユウヒ♡』

とでも言うように、不意に、ごちゅ、とナカで蠢いた。

いたずらな快樂の微電流、デリケートな尿道内壁をチクチクとからかうように小突く、悪意に満ちた戯れだった。

「ひ、あ……っ！？ あ、ん、ぐう……ッ！」

逃げ場のない狭い管の内側から、ピンと直接神経を弾かれ、悠緋は、下腹部から突き上げる異形の熱を、両手でぎゅっと押さえるようにして、その場にずるずると蹲った。

悠緋は溢れそうになる悲鳴を喉の奥で必死に押し殺す

頭のナカの『ヤツ』に向かって、掠れた声を心の中で叫ぶしかなかった。

（や、めろ……っ、中、つつく、な……っ！）

まばゆい陽の光が差し込む廊下。そこを悠緋は、ただ一人になれる場所を目指して、壁に伝いながら進むしかなかった。

ツンとしたアンモニア臭が鼻を突く。音楽室の方からは、時折ピアノの旋律に合わせて、のどかな歌声が微かに聞こえてくる。

そんな日常の喧騒から遠く離れた、古いトイレの個室。

悠緋は下腹部を焼くような猛烈な異物感に苛まれながら、震える脚で、やっとの思いでそこへ辿り着いた。

個室の鍵を閉めた瞬間、限界を迎えた。

スラックスの硬い布地が、熱を孕んでパンパンに怒張した陰茎の先端に擦れるだけで、脳髄を灼くような快楽の電撃が走る。

「は、あ、っ……あ……っ、この……っ、もう、だめ
だっ……っ！あ、ひ、ああ……っ！」

半狂乱になりながら、悠緋は震える手でベルトを弾き飛ばし、
スラックスと下着を一気に膝元まで引きずり下ろした。

力尽きたように便器へどさりと腰を下ろす。

「はっ……あ、んう…っ」

(出したい、出したい出したい出したいだしたい)

本来の排泄の機能を使って、中に居座るヤツを丸ごと押し出そうと、必死に何度も力む。

だが、どれだけ腹に力を入れても、排泄物が出る気配は微塵もなかった。

それどころか、悠緋が必死に尿道口を窄めて押し出そうとするたびに、先端に潜伏する『それ』はごちゅり、くちゅっと過敏な内壁にへばりつき、さらに奥へと根を張るように蠢くだけだった。

「ひ、ああ……っ、でない、ぬけない……っ！ あああ、いやだ、いやだあ……ッ！」

無理に力んだせいで、かえって陰茎の根本からドロリと粘度の高いカウパー液が絞り出され、尿道口へとせり上がってくる。

しかし、外へ溢れ出るよりも早く、尿道口のに潜伏していた『それ』が、音を立てて、その体液を貪欲に吸い上げ始めた。

じゅくうう、じゅるるるう……

「ひい、あ。あっ！？ んあ、吸わ、吸われ……っ、あ、ひぎいいつつ…ツツ！！」

射精した感覚はあったが、押し出そうとした発情の証をまるごと蛭のようなものに吸い尽くされ、尿道のナカが快楽の毒でキュウウと強烈に痙攣する。

『ごちそうさま、昨日もあれだけ出したのに、ユウヒの精子濃くて美味しいよ♡』

「あ、ぐっ…も、いい加減にっ……し、ろ……っ」

己の無力さと無様な発情を、脳髄のナカから直接嘲笑うかのように、あの魔王の声が響いた。

人類の防衛組織において最高戦力『レッド』と謳われ、人々の希望であるはずの自分が、今は誰もいないトイレの便器に跨り、太ももと、男の象徴を無様に丸出しにしながら強烈な快感に身悶える。すべては、尿道に潜伏する『ヤツ』の分身に、内側から翻弄されているせいだった。

地球を侵略せんと目論む悪の組織『ギガ・ネビュラ』

その組織を率いる絶対的支配者であり、圧倒的な戦闘力と残虐さを誇る異星の上位生物それが、この頭の中に直接語りかけてくる魔王『ロキ』の正体だ。

数日前、最前線で戦う悠緋は奴らに拉致され、敵の根城へと連れ去られた。

ロキの放った言葉が引き金となり、昨日の凄惨な記憶が脳裏にフラッシュバックする。

(あの日、……あの部屋で、俺は)

ロキの操る無数の太い触手で四肢を大の字に縛り上げられ、逃げ場のない空中へ吊るされたこと。

抵抗する術を奪われたまま、ぬめる触手に口と後孔を同時に、犯し尽くされ、陰茎を弄ばれ続けた。

思い出だけで、キュンと下腹部の奥が甘い痛みを伴って疼きだす。

異星の上位生物ロキの精子は通常の間人なら即死する猛毒だというのに、歴代最高のアセットである悠緋の肉体は、それを極上の催淫剤として吸い上げてしまった。

ロキの凶悪な体液を体中に注がれ続けた悠緋の身体は、気が遠くなるほどの絶頂を繰り返し、無様に射精を強制され続けたのだ。

『あはは、思い出した？ またたっぷり遊んであげるからね♡』

「ち、がうっ……俺はっ……っ！」

思考を振り払うかのように、赤らんだ顔を必死に左右へと振る。だが、どれだけ理性で否定したところで口から出る悲痛な拒絶とは裏腹に、下半身はロキの愛撫を心待ちにする雌の肉体へと、一歩ずつ、確実に堕とされていく。

「あ、ひい！んあぁっ、んぐ、ううう——ツツ！！」

否定の言葉はすぐに甘ったるい悲鳴にかき消される。

悠緋は嬌声を上げながら涙の溜まった真紅の瞳をただ見開くことしかできない。

吸い上げた体液を栄養にしてロキの分身がグズグズと肥大化を始めた。

まだ熱を孕んだままの敏感な粘膜を、内側からねっとりと愛撫するように刺激され、悠緋は下半身を押さえ、潰れた悲鳴を漏らした。

「あ、が……っ、は、あ、あぁっ、……っひ、あ、あ……っ」

『……ねえ、いつになったら雌になるんだい？ もう待ちくたびれたよ。早く僕の精子を沢山注いで、さっさと孕ませたいのに』

ここにいるのはヤツの放った分身に過ぎないというのに、まるでロキ本人がこの場に佇み、自分の下腹部をあの冷たくて長い指先でねっとりと撫で回されているかのような錯覚に陥る。

あの日、敵の根城に囚われ、散々身体を暴かれた挙句、脳内回路の主導権を握られた。

思考のプライバシーすら奪われ、意識のすべてをロキと同期させられてしまったのだ。

だからこそ、離れていてもヤツの低い声が脳髄へ直接流れ込んでくる。

ただでさえ敏感な尿道を刺激され続けているというのに、この甘く絡みつくような声は下半身に響いて仕方がない。

「は、はな……れろっ、……っんあぁっ！」

『ええ～、嫌だよぉ。むしろ折角地上に戻してあげたんだからお尻振って感謝してもらわないとね』

「う……、く、……ふざ、けるなぁっ……あひッ！！」

どれだけ必死に拒絶の言葉を紡ごうとしても、内壁をごちゅごちゅと激しく穿たれるたびに、悲鳴は甘ったるい嬌声へと強制的に裏返ってしまう。

男としての誇りも拒絶の意志も、頭のナカまで直通した快樂の濁流によって、ただドロドロに溶かされていく。

『ふふっ、いい声だ。でもいまいち変異薬の効きが悪いんだよねえ。男としての自我が中途半端に残っているからかなあ？』

脳内に響くロキの声が、愉悅を孕んで一段と低く、甘く、そして悍ましく変化する。

その瞬間、悠緋の尿道に潜伏していた分身が、体内の熱を吸い上げるようにして急激に、グズグズと膨張を始めた。

グズツグズツ、グ……ググウツ………じゅ……じゅく、じゅ、じゅっ……

「ひ、あぁっ……！？ナカ、裂け、んうううツツ！んお
おおおーツツ！！」

ただでさえ狭い尿道が、内側からあり得ない太さへと押し広げられていく。

あまりの圧迫感に、鈴口はロキの欠片を吐き出すように無様に押し開かれ、カウパー液がだらだらと溢れ出る。

しかしそれは次々と尿道口を塞ぐロキの分身に、出るそばからじゅぞっ、と不気味な音を立てて全てすすられた。

恐怖はそれだけに留まらない。悠緋の体内、膀胱と直腸を隔てる薄い肉の壁を這うように、体積を増した分身がグチュグチュと不気味な音を立てて枝分かれしていく。

『あは、すごおい。ナカで僕の分身が動くたびに、君の脳内回路がチカチカ点滅してるよ？ 早く子宮出来ないかなあ。とりあえず、アナルの方にも、僕を分けてあげるね♡』

生命への冒涇ともとれるような発言を軽率に放ちながらロキは遠隔で自身の分身を意のままに操る。

悠緋の内臓の裏側をナメクジのように這いずる軟体動物、悠緋はその気味の悪い感触に、身体を自由を奪われながら、言いようのない恐怖を覚えるしかなかった。